



大決壊!

ふくらむぱんつ

Σ一章目 友達のブルマを穿いてオナニー！ P3



Σ二章目 栞ちゃんのぱんつはおむつで P23



Σ三章目 もこりっ、膨らむブルマ P41



Σ四章目 響虎のわざとうんちおもらし P55



Σ 五章目 葉のこっそりオナニー

P77



Σ 六章目 授業中のうんちおもらし事件

P97



Σ 七章目 初めてのおむつ登校！

P135



Σ 授業中のうんちおもらし事件

「ん……。もう、朝……」

^{しおり}葉が目を覚ましたのは、すっかり明るくなった朝の六時半のことだった。

まだ目覚まし時計は鳴っていない。

枕元に置いてある目覚まし時計のスイッチをオフにすると、お尻に纏わり付いてくるのは冷たくネットリとした感触。

そのときになって葉は思い出す。

「そっか。^{きょうこ}響虎ちゃんのぱんつを穿いて寝たんだっけ」

ゆうべはおむつのなかに響虎のしましまショーツとブルマを穿いたままで寝たのだった。

寝ているあいだにおねしょをしたのだろう。

ショーツタイプの紙おむつは鮮やかなレモン色に染まり、前のほうまでパンパンに膨らんでいた。

「背中^のほうまでぐしょ濡れになってる……」

ショーツとブルマは、背中^のほうまでグッショリと濡れていて、お尻にペッタリと貼り付いてきている。

おむつのなかはどうなっているのだろう？

怖いもの見たさで、おむつの腰ゴムを引っ張って、なかを確認し

てみると――、

もわっ、もわわあ……。

おむつのなかから立ち昇ってきたのは、濃密なおしっこの匂い。アンモニア臭が湯気となって、あまりの臭気に涙が溢れ出してくるほどだった。

「凄い……黄色くなってるの……」

おむつの内側は、鮮やかなレモン色に染め上げられていた。ブルマの腰ゴムも引っ張ってみて、ショーツを確認してみる。

「響虎ちゃんのぱんつ、黄ぱんじゃってるの……」

もわわ～ん……。

濃密なアンモニア臭とともに露わになったのは、すっかり黄色く染め上げられたしましまショーツ。

もはや白いところはなく、葉のおしっこによってぐしょ濡れになっていた。

「ぱんつ、ヌルヌルする……」

クロッチの裏側は、愛液でヌルヌルになっていた。きっと寝ているあいだに、えっちな夢を見てしまったのだろう。

クロッチどころか、お尻のほうまでヌルヌルになっていた。

「本当なら洗濯しないといけないけど……」

だけど、せめて今日一日くらいは。

葉は小さく頷くと、おむつを穿いたままでベッドから降りる。

おねしょと愛液を一晩中受け止めてきた紙おむつは、ずっしりと重たくなっていた。

「今日はずっと響虎ちゃんと一緒……っ」

葉は頬を赤らめて呟く。

そしていつものようにポールハンガーに掛かっているセーラー服を着ていった。

「よしっ、今日はなんかいいことがあるそうっ」

スカートを穿いて、ぽんぽんっ、お尻をはたく。

おむつのなかには、響虎ちゃんのブルマとショーツ。

おむつを包み込んでいるスカートはセクシーに膨らんでいるけど、まさか葉がおむつを穿いているだなんて、誰も想像しないに違いなかった。

☆

チュンチュン。

小鳥の鳴き声に目を覚ますと、もう既に朝になっていた。

のっそりとベッドから身体を起こしたのは、ブラジャーとブルマというあられもない姿で寝ていた響虎だ。

ぬるり……。

お尻に感じるのは、コンニャクのような肌触りになっている葉のショーツ。

もうブルマの外側までヌルヌルに濡れそぼっていた。

「うう……。脱げなかったぜ……」

ゆうべは葉のショーツとブルマを穿いて、何回もオナニーをしてしまった。

しかも寝るときにも脱ぐことができずに、穿いたままで眠りについた。

響虎のお尻があった部分を中心として、シートには巨大な世界地図ができあがっている。

どうやら、寝ているときにおねしょまでしてしまったらしい。

「お、恐ろしすぎる……」

怖いもの見たさで、ブルマとショーツを降ろしてなかを確認してみる。

もわっ、もわわあ……っ。

立ち昇ってきたのは、甘酸っぱくも生臭い思春期の少女の匂い。
ショーツのなかは……酷いものだった。

愛液でクロッチの裏側どころかお尻のほうまでベトベトになっている。

透明だった愛液は時間が経ち、やや茶色く変色してショーツの染みになっていた。

「ずっとおまたに食い込んでたから、大変なことになってる……」

一晩中、ずっとおまたに食い込んでいたクロッチには、茶色い縦染みが刻み込まれていた。

縦染みは、お尻のほうにまで広がっている。

「うう、自己嫌悪だぜ……」

だけどいまから洗濯するわけにはいかない。

登校するまでに間に合わないし、なによりも猫さんのフロントプリントのショーツなんて洗濯しているところをお母さんに見られたら、とても面倒臭いことになってしまうに違いなかった。

こうなったら……、

「学校に穿いていくしかないぜ！」

今日一日くらい葉ちゃんのショーツを穿いていても罰は当たらないはずだ。

響虎はおもらしに濡れそぼった女児ショーツを穿いたままで、その上から何事もなかったかのようにセーラー服を着ていく。

……ブルマは蒸れそうだから、ベッドの下に隠しておいて。

「今日はいいことがあるしそうな予感がするな！」



(うおお！葉ちゃんのぱんつが、おまたに食い込んでくる！)

登校してきた響虎は、葉のショーツのクロッチがおまたに食い込んでいるのを感じていた。

それでも顔には出さずに、自分の席につく。

しばらくすると、葉も登校してきた。

(どうしよう。きのう交換こしたぱんつ、普通に考えたら今日返さなくちゃいけないけど……！)

だけど葉のぱんつは、響虎のスカートのなかでぐしょ濡れになっている。

とても返せる状態ではなかった。

だから葉が登校してきた瞬間に、響虎は行動を起こしていた。

「葉ちゃん、ちょっとついてきて！」

「ふえ!？」

登校してきたばかりの葉の手を引いて教室を出る。

やってきたのは、一番近くの女子トイレ。

幸いなことに、朝の女子トイレには誰もいなかった。個室へのドアも全部開け放たれている。

「ど、どうしたのかな!? 急にこんなところに連れてきて」

「とにかく、こっちだ！」

響虎は栞の手を引いて、一番奥の個室へと入る。

ただでさえ手狭な個室。

二人で入ると、ちょっとだけ窮屈に感じる。

だけどそれだけ栞ちゃんを近くに感じられるということだ。

和式トイレを挟んで、二人して向き合う形になった。

「ふう……」

響虎は、ひとまず額の汗を拭う。

だけど本当の山場はこれからだ。

今日はぱんつを返すことができないと、しっかりと謝っておかなければ。

「栞ちゃん、ごめん！」

「ど、どうしたのかな、急に」

「栞ちゃんのぱんつ、きのうのうちに洗濯しなくちゃいけないって思ってたんだけど、どうしてもできなくて、その……！」

もわわあ……。

響虎は頬を真っ赤にさせながらも、自らのスカートを捲り上げる。

甘い湯気とともに露わになったのは、白い生地に猫さんの顔が描かれたフロントプリントの女児ショーツ。

ただし白かった生地は何回もオナニーをしたから、茶色く変色した愛液によってまだら模様になっていた。

「きのうは我慢できずに、何回も、その……しちゃったんだ」

「わ、わたしのぱんつを穿いたまま……？」

「ああ。それに、おねしょも……」

「おねしょも……」

それっきり、会話が途切れる。

葉はビックリしているのだろう。無理もないことだと思う。

だけどその数秒後。

なぜか葉は、ホッと胸を撫で下ろしてみせるのだった。

「実は、わたしも……」

葉ちゃんは、頬を赤らめながらスカートを捲り上げてみせる。

露わになったのは、鮮やかなレモン色に染まっている紙おむつ。

ショーツタイプの紙おむつは前のほうまでパンパンに膨らんでいた。

「あれから響虎ちゃんのぱんつとブルマを穿いて……その、何回も

しちゃって……。いまも、おむつのなかに穿いてるの」
「俺の、ブルマと、ぱんつを……？」
「ほら」

もわっ、もわわ〜ん……。

おむつの腰ゴムを引っ張って、なかを見せてくれる。
濃縮されたアンモニア臭とともに露わになったのは、紺色のブルマ。そのなかに響虎のしましまショーツを穿いているところまで見せてくれた。

「す、凄え……。おむつのなか、蒸れてないのか？」
「うん。蒸れ蒸れになってる。響虎ちゃんのぱんつが、おまたに食い込んで、なんだか熱くなってきて……」
「うわあ……」

頬を赤らめて呟く栞に、響虎の鼓動は一気に早まっていた。
それどころか、股間が熱くなって、

じゅわわあ……。

クロッチの裏側に熱い蜜が溢れ出していく。
トロツとした体液はクロッチでは受け止めきれずに、

たらしー、
響虎の内股を、一筋の愛液のしずくが流れ落ちていった。

ぱんつのなかはおもらしをしたよりも酷い有様になっている。
それでも。

「うおおおおお！ 大好きだぜ！ 葉ちゃん！」

感極まった響虎は、葉の小さな身体を抱きしめていた。
あまりにも急なことで、葉はビックリしてしまったのだろう。

「あっ！ あっ！ あっ！」

しゅごおおおおおおおおおお……。

引き攣った葉のソプラノボイスとともに、スカートのなかから、
はしたない水音が噴出してくる。

どうやら失禁してしまったようだ。

それでもおむつを穿いているから漏れ出してくる心配は、なにも
ない。

目の前には、蕩けそうになっている葉の顔。

(やばい。キスしたくなってきてる……)

だけどさすがにそれはダメだと自重する。

ただでさえもう既に抱きついているのだ。

キスなんかしたら、それこそ葉ちゃんに迷惑がかかってしまう。

いま、この瞬間にキスをすれば、それは恐らく葉ちゃんにとって
ファーストキスになるのだろう。

もちろん、響虎にとっても、だ。

(ここで俺とのキスが、栞ちゃんのトラウマになんかなったら、それこそやりきれないし……！)

だからここはグッと我慢することにする。

響虎は栞の身体を解放すると、

「おむつ、大丈夫そうか？」

「うん。あと何回かは大丈夫だと思う。それに……」

「それに？」

「響虎ちゃんのぱんつとブルマが守ってくれてる感じがするし。多分昼休みまで大丈夫っ」

「そっか。それはなによりだぜ！」

響虎は栞の手を引くと、トイレの個室を出る。

幸いなことにトイレには誰もいないようだ。

もしもいまの会話を聞かれていたら大変なことになっているところだった。

☆

(ううっ、おまたがムラムラする……っ)

響虎が気まずそうに内股を擦り合わせたのは三時限目の理科の授業中のことだった。

ただここで葉のぱんつを脱ぐわけにはいかない。

女の子というのは、少しぐらいショーツを汚してしまっても平然としていなければいけないのだ。

その証拠に――、

響虎は、チラリと葉へと視線をやる。

葉は何事もなく、黒板の文字をノートへと書き写していた。

今日はずっと座学の授業だから、椅子に座りっぱなしだ。

葉のことをずっと見ていたけど、今日は休み時間に一度たりとも席を立っていないようだった。

たぶん、椅子に座ったままでおむつにおしっこをしているのだろう。

(さすが葉ちゃん。少しくらいおもらしをしても全然動じてないぜ……！)

葉のおむつのなかでは、響虎のしましまショーツとブルマが蒸れ蒸れになって、クロッチがおまたに食い込んでいるに違いなかった。

(俺のぱんつも……ううっ、大変なことになってるう……っ)

響虎が穿いている葉の女兒ショーツは、ドロドロに濡れそぼり、おもらしをしたときよりも酷い状況になっていた。

響虎は気づいていないことだが……、響虎のスカートには、お尻の染みが『♥』の形となって浮き上がっていた。

それは初潮を迎えたときのような、恥ずかしい尻染みだ。

(ど、どうしよう……)

じゅわわっ。

それに漏れ出してきているのは、愛液だけではなかった。

今日はまだ席を立っていない。

それはまだ一度もトイレに行っていないということだ。

響虎の膀胱には、こうして大人しく授業を受けている瞬間にも、一滴ずつおしっこが膀胱へと濾過されている。

(おしっこまでしたくなってきてる……！)

じゅわっ、

じゅわわあ……っ。

教室の時計を見上げてみると、授業が終わるまであと 40 分はある。

まだ授業が始まって半分も経っていない。

(さすがに早すぎる……！ トイレに行かせて欲しいなんて、言い出せない……！)

じゅわわっ。

じゅももももも……っ。

響虎は大胆で大雑把な性格をしているとはいえ、これでも思春期の女子だ。

授業中にトイレに行きたいだなんて……しかも授業が始まったばかりだというのに、言い出せるはずがなかった。

(我慢、我慢だぜ……！)

響虎は我慢することにした。

大丈夫。

まだ慌てるような時間じゃない。

(こういうときは、素数を数えて心を落ち着かせなければ……！)

1、2、3、5、7、9……！

って、1って素数じゃなかったような気が……!?

ジョボボッ！

意識が尿道から離れたその直後、チビッた……にしては多すぎる量が噴き出してくる。

どうやら思っている以上に危機的な状況らしい。

(ううっ、栞ちゃんのぱんつが……おまたに食い込んできてえ……！ ムラムラするう……！)

ヒクンッ、ヒククンッ！
じゅわわあ……。

おまたから溢れ出してくるのは、おしっこだけではなかった。
切なげにクレヴァスが痙攣すると、トロツとした蜜がクロッチの裏側へと広がっていく。

ぱんつのなかはヌルヌルになっていて、まるで生卵を流し込まれたかのような状態になっていた。

(我慢、我慢、我慢……！)

響虎は心のなかで何度も唱えて、ショーツの不快感と尿意を堪えようとする。

だけどそんな響虎を嘲笑うかのように、蒸れ蒸れになったショーツはぺったりと響虎のお尻に密着してきていた。

ぎゅろろろろ……ッ！

「お、おふっ!？」

いきなりこみ上げてきたのは、便意。
それはあまりにも突然のことだった。

蒸れたショーツは、股間の部分は熱いとはいえ、お尻のほうは冷たく湿っている。

そのせいでお腹を冷やしてしまったのだろう。

(うそ。こんなときにお腹が痛くなってくるなんて……！)

まだ授業が始まって半分も経っていないというのに。

こんなタイミングでトイレに行かせてほしいだなんて……しかもうんちをしたいだなんて、恥ずかしくて言えるはずがない。

せめて休み時間まで我慢しなければ。

(ぐおお……っ。なぜこんなことに……！)

そう言えば今朝は、毎朝あるはずのお通じがなかった。

無意識のうちに葉のショーツを汚したらダメだと、身体にセーブがかかっていたとでもいうのだろうか？

(我慢、我慢だ……！　せめて休み時間までは我慢しなければ……！　ううっ、大変なことになる……！)

ゴロゴロゴロツ！

ギュポツ！　ギュロロロツ！

お腹に手をあてて痛みを堪えようとする、確かに感じる事ができる。

体内で、腸が蠢動している感触を。

それはまるで、大蛇が暴れ回っているかのような感覚だった。

(少しでも気を抜けば……、思春期の死、あるのみ……！)

ゴポポッ！

ギョルギョルギョルッ！

直腸の圧力が、極限にまで高まりつつあった。

もしもいま、お尻の力を抜けば、どんなに楽になることができるだろうか？

この苦痛から解放されたい。

そう思って、フッと意識が遠のき――、

(ダメ！ 絶対ダメ！)

きゅううっ！

響虎は再び肛門を閉じようと力を籠める。

せめて。

せめて休み時間まで我慢しなければ。

不幸中の幸いか、気がつけば嵐のような腹痛は弱まっている。

(な、波は越えた……か!?)

冷や汗を流しながら、自らの腹具合を探る。

どうやらひとつの波を越えることができたようだが……、
だがまだ油断はできない。

(腹痛には波がある……。まだ、油断できないぜ……！)

腹痛というものには、波がある。

ひとつの波を越えても、また第二波、第三波と襲いかかってくるものだ。

しかもその波は、少しずつ、確実に強まっていき、やがて大決壊へと至る。

(油断したら、ダメだ……！)

そう思って授業に集中しようとした、矢先。

体内の大蛇が、再び蠢き出す。

ゴロロッ！

ギュルルルッ！

「おっ、おごっ!？」

あまりの痛みに、響虎は舌を突き出して悶えていた。

額にはじっとりと脂汗が浮かび、背中には滝のような冷や汗が流れ落ちていく。

葉の女児ショーツは汗とおしっこでぐしょ濡れになっていた。

(だ、ダメだ……。俺のカルマ……。まだ、地獄の門を越えないでくれ……！)

ギュロロロッ！
ゴポッ！　ゴポポッ！

それは誤魔化しようのない第二波。

直腸の圧力が極限にまで高まっていき、少しでも気を抜いたら漏れ出してきそうになっている。

(椅子に押しつけて……我慢……うおおおっ！)

ただでさえ女子の括約筋は、男よりも弱い。

それなのに、男よりも溜め込みがちにできている。

響虎は肛門を椅子の座面に押しつけて、便意を抑えつける。

それはもはや、自分の力だけでは我慢できなくなっているという裏返しでもあった。

(我慢……しないと……！　大変なことに……あううっ！　ダメ、漏れ出てきたら……絶対、ダメだ……！)

ギュポポッ！
ギョルルッ！　ゴロロロッ！

便意というものは、あまりにも無慈悲だ。

最初は弱くとも、我慢を重ねれば重ねるほどに強くなり、人間を苦しめる。

思春期の少女には、その痛みがより強いものとなって襲いかかっていく。

「あっ、あああっ」

ぎゅろろろろろ！ ごぼぽっ！

自分でも信じられないくらい不吉な音が、お腹から聞こえてくる。

その激痛たるや、大腸を雑巾絞りされているかのような痛みだった。

(栞ちゃんのぽんつを、これ以上汚せない……！)

ゴロゴロゴロツ！

キュルルツ！ ゴポポツ！

これ以上、栞のショーツを汚すわけにはいかない。

その一心で我慢するけど、しかし人体には限界というものがある。

ふっくらとした思春期の少女の括約筋が、メキメキとこじ開けられようとしていた。

どうやら直腸にあるうんちは、コルクのように硬く、栓になっているらしい。

(だ、め、だ、あああ……っ)

メキメキメキ……！

ギョルルツ！ キュルルツ！

不吉な音とともに、コルク状のうんちによって直腸が拡張されていく。

もはやどんなに肛門を閉じようとしても、その進行を食い止めることができなくなっていた。

「うっ、あああああああ……っ」

メキメキメキ。

メリ、メリメリメリ。

どんなにお尻を閉じようと思っても、どんなにお尻を椅子の座面に押しつけても、コルク状のうんちによって直腸がこじ開けられていく。

そして、ついに。

ぶっ、ぶふおっ。

肛門から奏でられたのは、茶色い炸裂音だった。

それはこれから始まる悲劇への号砲。

その音は無慈悲にも教室中に響き渡り、その瞬間、教室が静まりかえる。

『えっ……？』

『誰だよ、屁えこいたの』

クラスメートの視線が、一斉に響虎へと集中する。

だけど響虎は、額に脂汗を浮かべて、動くことさえもできなくなっていた。

響虎の直腸では、いま、この瞬間にもうんちが排泄されようとしていたのだ。

「うっああああああああっ！」

メリメリメリッ！

むりゆりゆりゆりゅっ！

ついに響虎は力尽きてしまう。

肛門からフッと力が抜け、その隙を見逃してくれる便意ではなかった。

極限にまで高まっていた腸圧が、その出口へと向けて殺到し、チュポンッ、硬質便のコルクが飛び出した、その直後だった。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！」

もりもりもりっ！

むりゆむりゆむりゅっ！

ショーツのなかへと、一瞬にして灼熱のマグマが放たれていく。葉のショーツなのに。

響虎のお尻には、ネットリとしたうんちにまみれ、それでも排泄は止まってはくれない。

むしろその勢いを増していた。

「だ、ダメ……！　こんなの……うっあああああ！」

ブリブリブリッ！

ブリュリュッ！　ブババババツ！

可憐なセーラー服の、そのスカートから放たれるのは、あまりにも穢らわしい茶色い不浄の音。

椅子に座っている響虎の座高が、見る間に高くなっていく。

響虎の身体が、ショーツに詰まった軟便によって押し上げられているのだ。

「んっ、あっ、あああっ、ら、らめえ……」

ぼふっ！　ぼふふっ！

ぶっふおっ！　にゆるるるる！

直腸を貫き、這い出してくる軟便はまるで大蛇のようだった。

溢れ出してきた大蛇はショーツのなかで潰れ、茶色いトグロとなって響虎の身体を押し上げていく。

『えっ……うそ……。響虎ちゃんが……？』

『ウンコ漏らしてるのか……？』

シンと静まりかえった教室に、ひそひそ声が妙に大きく聞こえる。

だけど響虎の肛門は黙ってはくれなかった。

「だ、め、だあああ……っ。こんなの、おかしいのに……！」

ぶりぶりぶりっ！ ブボボッ！
にゆるにゆるにゆるにゆるにゆる！

可憐なスカートから放たれる、穢らわしい茶色い爆音が止まらない。

響虎のお尻を包んでいるスカートの輪郭は、もこもことその大きさを膨らませていった。

悲劇はまだ終わらない。

「あっ、あああっ！」

じよわわわわっ！
ぢよわわわわわわわわわわっ！

噴き出してきたのは、おしっこだった。

生温かな飛沫がクロッチに跳ね返ると、会陰を伝ってお尻のほうまでもが生温かくなっていく。

おしっこは、うんちとは違ってショーツから滲み出してきてしまう。

「うううっ、ダメだ……止まらない……ううっ」

しゅわわわわわわわわわわわわ……。
ぶりっ！ ぶぽぽっ！ むりゆりゅっ！



どんなにおしっこを止めようと思っても、極太の軟便によって肛門を拡張されている。

肛門が拡張されれば、尿道までもが拡張されるのは当然のことだった。

女性器というのは、おしっこを我慢するにはあまりにも不都合な形をしているのだ。

「ぱんつのなかが……、熱い……よお……」

シューイイイイイイイイイイイ……。

スカートから響く、くぐもった水音が止まらなくなっていた。
生温かな恥水がショーツから滲み出してくると、椅子に座っている響虎の太股のあいだに黄河が出現する。

もわっ、もわわあ……。

響虎を中心として、生温かなアンモニアの湯気が立ち上る。
それはあっという間に教室に蒸れ返っていった。
香るのは、アンモニア臭だけではなかった。

ぶりぶりぶりっ！

ブボボボッ！　ボフフッ！

茶色い炸裂音が何度も響き渡り、可愛らしいスカートから漂いはじめたのは、鼻が曲がるような腐敗臭だった。

それは本来ならば、誰にも嗅がれることなくトイレの水に流されるべき不浄。

それをあろうことか教室で、しかもみんなに見られているというのに放ってしまっている。

「お願い……見ないで……。こんなところ、見るなあ……っ」

ビチビチビチッ！

ブジュジュッ！

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

口では見ないでほしいと言いながら、しかし思春期の身体は少しでも早く毒素を排泄しよう腸を蠢動させる。

女兒ショーツはパンパンに膨らみ、響虎の席を中心としてレモン色の湖が広がっていた。

「あっ！ あっ！ あああっ！」

きゅんっ！ きゅんっ！ きゅんっ！

ぶりりっ！ ぶぼぼっ！ びちちっ！

こんな状況だというのに――。

響虎は軽く達していた。

ショーツのなかではマグマのような軟便が前のほうまで広がってきて、ふっくらとしたクレヴァスに食い込んできているのだ。

容赦無くクリトリスが蹂躪されていき、官能的な高圧電流が身体を、意識までも痺れさせていく。

(き、気持ちいい……)

ブリュリユリユリユッ！
ビチチチチチチチチチチチチ！

漏らしながら、こみ上げてきたのは羞恥心を上塗りするほどの快感だった。

ただでさえ我慢に我慢を重ねていたうんちとおしっこを放っているのだ。

更にはクリトリスまでもを蹂躪されている。

排泄欲と性欲。

二つの本能的な欲求を満たし、響虎の身体は無意識のうちにプルプルと痙攣していた。

「あっ、あああ……。だめえ……。ぱんつのなかがヌルヌルになって……。おまたにも食い込んできて……。あうっ」

ぶばばっ！
プッシュアアアアア……ッ！

一際大きな爆音。

そしてクレヴァスからおしっこが噴き出してきて、響虎の決壊は唐突に終わった。

それでも漏らしてしまった醜悪な不浄が消えてくれるわけではない。

響虎のショーツはうんちで前のほうまでパンパンに膨らみきり、響虎の席を中心として大きなおしっこの湖が広がっていた。

「見ないで……。こんな俺を、見ないでよお……」

呟くも、響虎のスカートからは茶色い腐敗臭が漂い、教室に蒸れ返っているようだった。

クラスメートたちの視線は、響虎へと注ぎ込まれている。

教壇に立っている先生でさえも、どうすればいいのかわからずに、ただ響虎を見つめているばかりだ。



ここまで読んでくれてありがとうございました！
体験版はここまでです。

次のページからは既刊のCGの紹介です。

骨の髄まで楽しんでもらえると嬉しいです！

既刊紹介



